



釋迦御一代記圖會

三



八 13

古田
同

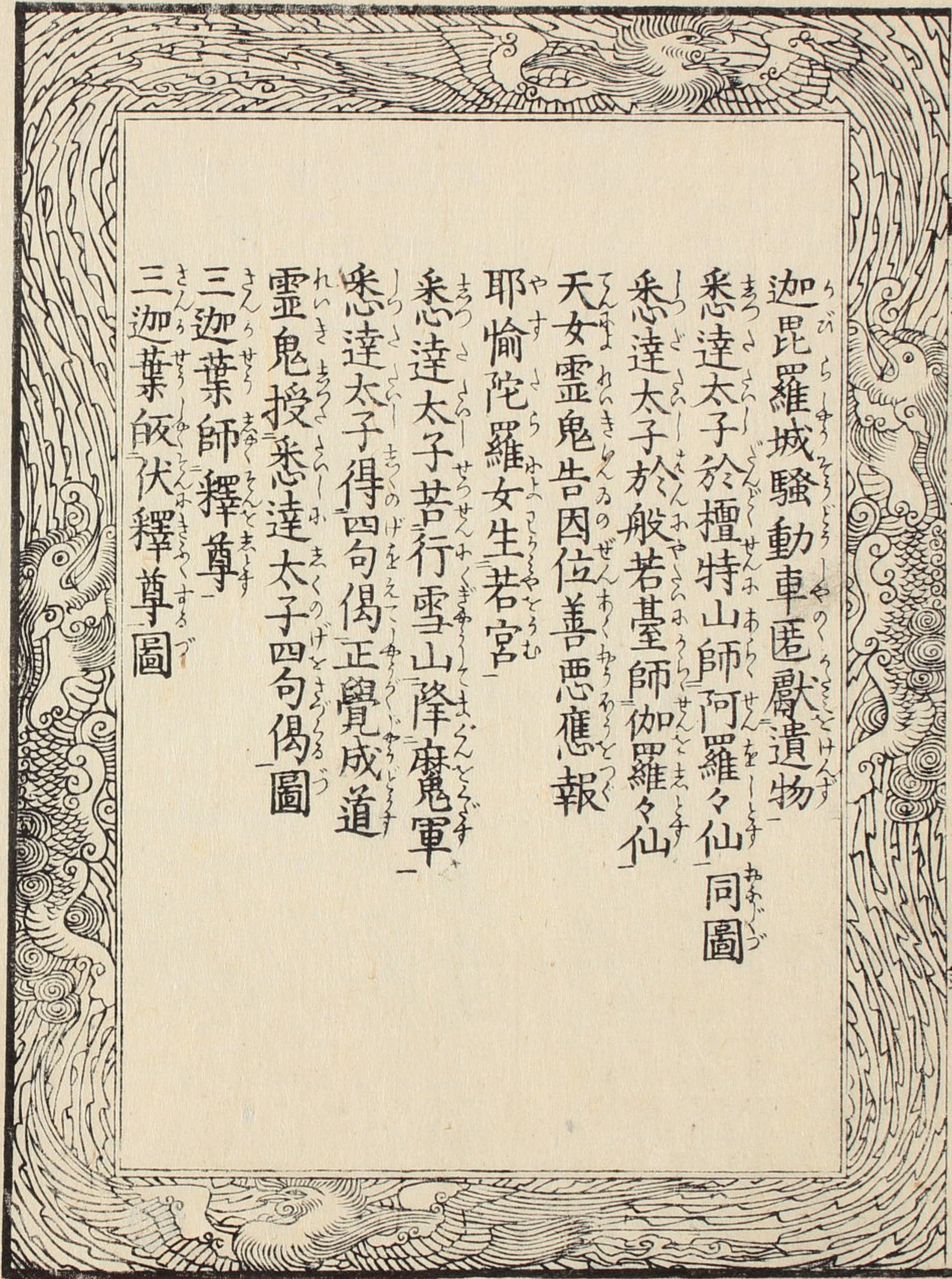
釋迦御一代圖會卷之三

目錄

- 淨居佛三試悉達太子
- 淨居佛化比丘試太子圖
- 諸童子為太子語諸國地理圖
- 悉達太子暗知檀特法基
- 悉達太子出宮中赴檀特山
- 耶愉陀羅女与太子悲歎留別圖
- 悉達太子赴檀特山圖
- 悉達太子託遺物車匿

史記圖會卷之三

目錄



迦毘羅城騷動車匿獻遺物

悉達太子於檀特山師阿羅々仙同圖

悉達太子於般若基師伽羅々仙

天女靈鬼告因位善惡應報

耶愉陀羅女生若宮

悉達太子苦行雪山降魔軍

靈鬼授悉達太子四句偈圖

三迦葉師釋尊

三迦葉飯伏釋尊圖

浪華好茗堂野亭考選

釋迦御一代圖會卷之三

淨居佛三試悉達太子

浪華好茗堂野亭考選

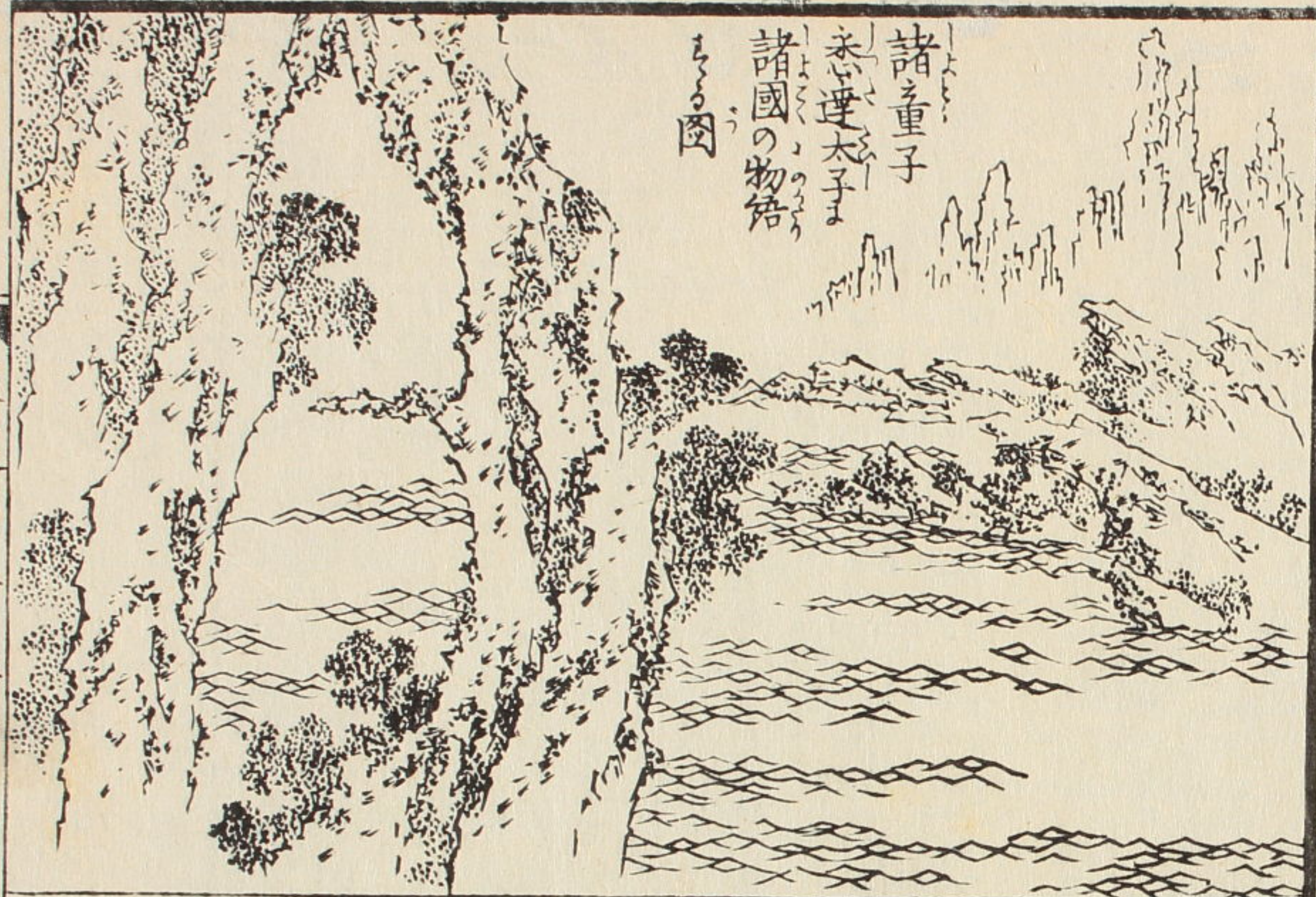
仰夷衛國王乃愛女耶輸陀羅女悉達太子乃新宮小備りく後八鹿野瞿陀弥
乃兩女と俱小三妃太子乃左右を片内も去と絲竹を調を歌舞を奏し只管太
子乃御心を慰なるといふも曾て関門へ入らざれば三新宮も小望を失ひ高安平の
花をかかむる心地し又小橋曇痛夫人浄飯王の内意を清耶愉陀羅女婚姻
乃後八治定枕席を交ふらると日々小新宮小仕る女官を召て向のふらば枕席
を俱小まひり体又えむをこち小ぞ夫人心を困む潜小耶愉陀羅女以下三新宮と
招く仰々八抑太子の脚更何なる宿因乃然しむるや只富貴歡樂を欲しむるを
幾心修行乃そふた事茂の好も大王余小皇子とも不在を只此事を憂ふ
若宮中を潜出小事とやとく城乃四門乃閑閑乃音四里か向小音争り小造設昼
夜三千人乃守衛乃監平を置む宮内小容貌風姿勝る妹女童女三千人

を侍し。且普く諸國を尋も。御身等三人乃新宮を備ふ。何卒出家学
道乃念を断。王位を受禪。人の事を欲し。然も三人も太子の御意を慰
出離の思を断。轉輪王乃位を踏む。計ひ。社貞操も孝行も。や。夫
女乃身。小三乃怠。ある。弟。小嫉妬。乃怠。なり。電を争ひ。愛を貪る。心。より。自然。不
良。乃心。生じ。嗔。患の。焰。小胸。乃鏡。を曇。せ。君。乃護。を怠。る。吏。あり。是。弟。乃。慎。なり。
二。小。慢。心。乃。怠。なり。君。乃。覺。き。て。人。乃。尊。敬。重。を。れ。自。然。心。憐。り。其。色。外。小。顯。れ。
い。ろ。ろ。乃。妬。を。結。善。事。云。隱。され。惡。事。見。露。され。讒。言。重。り。て。却。く。君。乃。疎
を。結。心。屈。して。怠。を。生。じ。て。三。小。睡。眠。乃。怠。なり。終。日。乃。勤。仕。心。倦。は。れ。夜。不。覺。熟
寐。して。君。の。傍。を。怠。なり。此。三。事。を。能。く。慎。む。何。卒。君。乃。御。意。を。練。り。若。宮。の。出。果
させ。あ。ま。り。計。ひ。む。と。れ。ぐ。と。教。訓。し。む。ひ。れ。む。三。人。乃。妃。小。骨。身。小。徹。り。て。忘。り。て。感。涙
小。袖。を。ひ。り。慎。む。領。掌。し。是。より。三。新。宮。互。小。妬。を。恨。む。心。を。慎。む。相。助。て。太子。小。奉。仕
し。只。願。出。塵。の。御。望。を。断。し。も。ん。と。計。む。然。も。彼。淨。居。佛。ハ。先。小。老。病。死。の。三。苦

を以て太子乃道心を勵し。い。い。が。今。三。人。乃。新。宮。心。を。竭。く。太子。乃。春。情。を。誘。を
天眼通。小。忍。く。太子。乃。三。女。乃。色。香。小。不。され。道。心。怠。り。む。ん。と。疑。ひ。神。通。を。以
て。太子。乃。心。小。出。遊。せ。ん。吏。を。思。ひ。む。是。小。依。て。太子。野。外。小。出。遊。多。く。思。召
鳥。將。軍。を。召。れ。丸。久。く。宮。中。小。在。く。稍。氣。爵。を。生。せ。り。依。り。郊。外。小。遊。ん。て。思
り。御。然。る。く。又。大。王。小。奏。して。勅。許。を。願。ふ。と。余。ト。鳥。將。軍。奉。り。王。宮。へ。参
り。太子。外。遊。乃。御。望。有。り。殘。奏。と。る。小。淨。飯。王。曰。く。先。小。太子。乃。意。を。慰。ん。と
外。遊。を。勸。し。小。老。者。病。者。死。者。有。り。却。り。太子。乃。心。を。憂。へ。たり。是。何。者。乃
障。碍。か。る。吏。を。ち。む。其。ハ。も。是。朕。ハ。只。太子。乃。出家。学。道。せ。ん。吏。を。怕。り。たり
然。も。多。く。太子。乃。外。遊。せ。ん。と。思。を。遮。り。停。る。小。忍。む。と。汝。眺。望。し。野。外。小。行
宮。を。造。り。太子。を。伴。ひ。く。官。人。小。と。俱。小。守。護。一。猶。五。十。里。乃。外。東。西。南。北。小。一。千
人。乃。乃。禁。兵。を。置。く。其。不。虞。小。備。へ。り。太子。國。を。潛。出。ん。と。甘。を。遮。り。苗。一。灸。よ
且。外。官。小。命。し。く。道。路。を。灑。掃。し。老。病。死。ハ。を。吏。乃。臭。穢。不。淨。乃。者。を。ハ。在

しむる更方なり。今般太子乃心を憂しむる者を置を決し刑戮を免さざと
嚴令し烏將軍慎み宣旨を奉り退去して月景城小回り太子小湯
勅許乃母むねを言上し百二小命とて城北乃眺望上は所小行宮を建し
不日小く造宮成就しを御遊乃殺残る方あり。城外五十里四方小千の
禁兵を屯せし不意乃備をたし。準備十分調らる其旨太子小啓白し是小
依る悉達太子烏陀夷をもちし童男童女を將し月景城を出し此般
八寮乃御馬小召し城乃北門より郊外乃行宮さして歩ませむ三新宮後宮
嫁女を從へ車小乗し隨逐ある烏將軍の教導し先小進し新小宮行宮
小清し酒宴を催し妓樂を奏して慰進しせり太子小逸樂を好むむされ
む女時ありく烏陀夷以下十余人を從へ野徑を逍遙し遠近を眺望しむ小
一大樹斂系茂し其下小平博なる石有る昔苔緑の纏を布し如くこれを太子
甚ぶ愛しむ烏陀夷亦を顧り曰く汝達ハ此所小待よ九八彼石上小憩て風

景を翫るし唯一人寛ふ歩む彼樹下石上小端坐しむ小静小思念して御坐
す其河浄居佛化して一人乃比丘となり難髪して法服を著し右手小錫杖を
策左手小鉄鉢を把り来る烏陀夷以下の者ハ瞬もせむ太子の動止を守ると
も曾て此比丘を見る事なく唯太子の御目小とり問く曰く汝ハ是何者や浄居
佛答て曰く貧道ハ是比丘なり太子曰何なり比丘とや答て曰く能父子夫婦乃愛者
を新輪廻を離る是を比丘と謂り太子亦問む何故愛者を捨輪廻を断や
答て曰く一切衆生皆五濁の爲小身を汚し六欲の爲小心を惑はれて老病死の迅速
なる事を悟ぎ生死乃苦畏小沉淪して無上菩提の快樂有る不知我が修学と
ふ所乃如たハ色聲香味觸法小執着せし無漏聖道小心を游し遠く八苦の海と
過解脱乃岸小着無爲の都小到るなりこれ王侯貴人より一切衆生乃世小在
こく譬の一乃井裡小陥り半途小僅乃小草有る取者下成臨む毒龜口成張て
隨たを呑金と勢をたし上を望む悪虎牙を怒り上を喰んと待たをよる小難



諸童子
悉達太子
諸國の物筈
の図



淨居佛
比丘化
悉達太子
無常と示
の図

く下る難く刺へかともる小章とく黒白乃崩来て其根を食が如しけれは妻子
 珍密及び王位乃貴も持ふとぞ。一ひ無常乃刀風遭む悉く解あん噫呼危れ
 るもとちうらた急おとて満身金色乃光を放ち端最妙相乃佛と化し虚空小騰り
 る去む太子愕然とて初く悟りむ儲緒天伎小比丘乃姿と化し出家功德の廣
 大なる事を説示しむふとぞ善哉々々天人の中唯無上菩提の道勝まる。九誓て
 此道を学び天人も亦化度せんと大道心慈小決定し胸乃雲霧赤霄々々新小真如
 乃月をる妙。歡喜踊躍小勝むるも鳥陀夷を近く召ま九月甚く樂しかり
 いざ還るると曰ふ鳥陀夷が曰君々々此行宮へせむいまも手目成も還しむるを希は
 猶暮るむと脚遊あせむと勸もれも太子頭を振むひ否樂極ぐとぞ早く
 帰路を促せと仰るも鳥陀夷已更を得む鳥將軍小其旨を告太子を密鞏軍小
 兼なり。三新宮及び許姜乃宮女前後を圍繞し終小月景城へ還幸なりなりなり
 此日破利舍那城乃好容夫人皇子を産む是を後小難陀太子とやなりなり淨飯

王乃御歡ハりも更かり満朝乃百官トリ末々民間ナク萬世を唱て祝しなりなり

悉達太子暗知檀特法臺

難陀太子降誕小依て王宮賑ひむも。独悉達太子の。郊外小於く比丘乃鏡
 を安むひりより愈出塵厭離乃念崑崙の嶺よりも高く如何もて宮中於潛出
 るもと思召も。那里小到てう幾少の師を得るれと思煩むひり。耽と心着むひ緘や
 人乃結り草小の十人結む十里乃更を知り縋り。臣下乃息男の中小才智有との
 疾呼聚四方八方の更を絡せくも。自然並發心の師乃在所を知りもあらしむ
 橋曇彌乃御許使をまれ丸此頃ハ頻ハ心驚。絲竹乃音を安中懶ハ心何卒
 緒卿乃子息の中あり。才智ある者を數人召寄む。其亦小物語させく意を
 慰めんとやせ。其母夫人はむは是ハ然るべし脚心慰なりとぞ。王宮へ其旨
 奏しむ。淨飯王の理小思召星光臣小命り。月卿雲客乃中あり。年才有
 息男ハ擇しむ。即ち十三人を擇出して太子の宮中へ進せたり。太子大小

悦むを以て其童子ホを御前小聚。昼夜種々の物語をさせくまひ。見童們
 八真ある事小思ひ己が隨思見聞する事。成滅虚誕よりせきくもるく小結
 々る。太子ハ唯出離の師を需んる方使れども。ちつけ小然る吏を向む。自
 然世小洩る。宮中茂潜出た妨小成らん。不如吏小純く其緒を曳出さん小とそ
 小あくぬ休めく衆童小對仰々小い小你達天地の向小任やの生々生る者
 小皆九が如く心々小友を聚遊中々小仰せられむ。一人の童賢がらとや中やう
 さん皆そよくの友成得く遊ひたり。然れども亦品々易る事乃ハ先龍ハ諸虫小
 一々緒虫と鱗牙をりて。麒麟ハ諸畜小一々緒畜と脚躡をけり。縁ごと
 中ハ然れども是等ハ情をなれ者なれむ。友をせく己々情を見し小ハ半時中友
 小離れむと人ハ萬物乃靈也。心をせく友々心の合ざる成友とせむ。然れ我を
 志ん欲せむ其友をんる。古く聖中ハ結りね。然小一人乃兒童進出
 禽獸の上ハいも形をせく友とま事勿論なり。但一人間の上小於く心を

友とま事。吏信く。親子兄弟形容ハ似ても心奇くを呪他人小心の奇た人ハ
 有る。有るを其人なり。我心を我が友。独慰む者有る。難く先
 の童子曰。是ハ頑也。史より史心なれ人乃上六論。吾がハ道ある人乃上
 を論ひたり。以後の童曰。其道とハ如何なる吏小や。言の序小承りんと
 ぞや。先ハ童子曰。吾も精ハ不知い。史及く。程ハ結ひたり。それ世上道と
 稱る者。無限なり。魚先文道筆道。音声道。絲竹乃道。歌舞乃道。陰陽筆
 數。天文地理。或ハ弓馬軍戰乃道。其餘ハ枚舉小遑あむ。是等ハ高技。我の
 道。これ且一。其れ真の道と号する。心を友とま事。道也。所謂賢道。明道。
 聖道。乃三通なり。賢道と縉。ハ設心。報謝乃道也。金仙乃修。ま事。所明道と
 縉。ハ明始。驗者。澄家の秘。吏と承る。諸聖道とハ仁義。撫育乃道。小國土
 安全乃大道。乃此三通。小ま事。由学究一人。真乃人。とや。乃と。答。後ハ童
 又曰。聖道。世小百吏。維中。知所なり。唯賢道。明道。と。道。を不知。乃何國

小ひや答て曰我も往くへんぞいへども或人の言ふに此國の天門に當りて行程一千三
百里を隔る。檀特山の峯山嶺より雪山医王の黎山青龍峯多羅維陀伽陀山伽
毘羅阿私屈陀般若山僧波婆羅育陀金剛胎入の衆の法の峯歩はた賢
道魚為乃の神仙心を友とて行を多て住とて亦鬼門に當りて一千二百五十里の行
程を隔阿育山阿私陀山喜羅々阿闍部妙見聖尸羅六河羅優鉢羅山を
乃靈山有皆是明始驗者乃行ひるを所なりと云及るなり。是亦も尚世よりと
するやと。言語よもてく。宛んが後の児童言句小結り。赤面して口を雨たり。太子
始より二人の回答を居むひ。慈悲修行の名山を云むひ。心中御喜悅限り。是
志よりかぎり緒天丸が誠心を憐れ。此児童小結りて言り。又小を感概しむひ。か
さあやぬ躰中く仰るる。実中珠の物結をよもの多。但一千三百余里乃行程六陸
ほたよや海路小やと向ふ先の童子が曰五百里陸野道ゆく民家もいより。五百
里六谷川道と。或大河或を函谷ゆく。渾夫山賤乃拙はれく。亦在ども甚難

路のよ。三百里山道中く尤嶮岨のよ承りて何心なく語りたる。太子よしく生
りむひ。借小難くを。是や出離の先達をりたりと心ひら小収りむひ。緒童子
成方ひむひ。汝達の物結ゆく日來の爵を暗しぬ。今宵公夜も更れを亦くと来
りて語り慰ひへん。それ小賞衣を賜ひ。脚の多下されれを緒童子大悦
ひ。君恩を謝して宮中退出たる。

悉達太子出宮中赴檀特山

其后太子小彼児童が回答を胸中小紀。都城より天門禳云一千三百里彼方なる
檀特山小令登我心の師をり。年月の宿意を遂ぐと。思召ども。淨飯王の法
令厳く。假初乃脚出遊中。數多の官人前後を圍繞。夜四門の守衛固を
宮中茂潜出り。使りて心かむも。春と暮れ秋と過已小御年十九歳也。成
せむひたる。太子頻小御心苛ち斯く宮中在。何因成道の時有。念好々此
上六父大王母夫人の貴意小背くも。一度檀特山小到。心強し思立維をり。此

宮中を潜出たると人心を附く窺ひし小智才人勝と負操又類なれ。耶輸陀羅女も勝る人なれ。一夜更蘭人定り。後太子耶輸陀羅女を御身迫く招寄。あひ平日より馴じく御物結ありて。借仰出され。八樹の蔭小者り。一河乃なる。成敗も。世々ぬ奇縁と増し。況丸と御身と夫婦とたる。更因位契深れ。わたり。おそ御身小丸が。一大事。大明頼り。義あり。承引なれ。や否と。曰。妃。色。成。正。是。八。改。り。仰。ふ。自。國。を。出。内。より。命。成。君。小。なり。故。卿。乃。又。母。同胞。を。成。も。顧。る。を。君。乃。御。為。な。く。痛。の。中。も。入。水。の。底。も。赴。た。侍。な。り。何。更。小。丸。御。を。背。に。下。と。答。り。る。太子。悦。ば。せ。其。赤。心。を。見。上。何。を。包。む。丸。普通。の。命。變。り。母。夫人。の。胎。内。不。在。と。三。年。小。丸。乃。萬。乃。若。悩。を。見。せ。上。出。延。の。後。七。日。小。丸。乃。母。君。ハ。逝。去。小。丸。乃。其。善。提。を。吊。ひ。具。一切。衆。生。を。化。度。せ。人。為。小。出。家。守。道。の。望。ま。年。々。り。お。そ。又。大。王。姨。夫人。の。慈。念。を。見。今。日。ま。く。黙。止。れ。小。丸。乃。已。小。丸。乃。十九。才。今。出。離。せ。ど。何。時。を。期。と。死。後。て。今。宵。宮。中。を。潜。出。今。思。へ。り。御。身。潜。り。引。

路して宮門が閑たれを伴ひ出りて。思へ仰れを妃と胸塞りける御望あれをこそ先頃御母夫人の微細と教訓しむ。此身乃浮沈此時なり。太子乃御心小後を御母乃御恨を受ん。母公の恨を受んと。これを太子乃御心小背く。小至る。是。ハ。如何せま。と思困。而。乃。眼。より。湧。出。る。泪。泉。の。如。く。何。と。答。ん。約。ふ。な。く。只。平。伏。す。泣。居。む。小。丸。乃。太。子。女。の。氣。色。を。損。じ。む。是。ハ。言。甲。斐。を。心。ろ。小。此。宮。中。小。丸。乃。言。を。背。ま。た。者。ハ。御。身。乃。と。思。む。こ。そ。一。大。事。を。告。げ。れ。此。を。猶。承。引。と。あ。ら。む。七。百。生。乃。契。を。断。丸。自。出。る。と。く。突。然。と。起。む。小。丸。乃。抑。留。是。ハ。如何なる御更。之。を。誓。言。す。約。を。乖。ふ。背。に。な。れ。邊。莫。此。宮。中。小。丸。乃。新。宮。小。備。つ。り。小。名。の。中。一。度。も。食。然。と。も。小。丸。乃。今。飽。ぬ。別。を。な。ま。る。小。丸。乃。又。大。王。御。母。君。乃。問。む。小。丸。何。と。言。と。よ。ゆ。な。く。潜。出。む。小。丸。乃。知。り。あ。ら。む。小。丸。乃。自。を。責。恨。む。小。丸。乃。と。お。お。わ。有。く。甲。斐。を。た。玉。乃。緒。の。絶。ぬ。ぞ。な。れ。恨。な。れ。と。亦。伏。沈。く。と。泣。む。小。丸。乃。太子。も。其。心。中。を。察。す。中。む。小。丸。乃。御。衣。の。袖。を。沾。じ。む。小。丸。乃。右。乃。手。の。風。指。中。小。丸。乃。

懐を指むひさふ深く歎むひそ丸御身と枕席に交されども。今日よりして二年の後必
 然男子を産ぞ丸幾心修行乃ち。自然死去まとも遺孤とわのひ慈育む長
 物語を人小使せく覺られぬ悔とも更小甲斐有ま早くと忙せむあぞ妃
 と唯夢小夢人し心地か。是非なくまて局々乃扉を開け曾く浄飯王に
 余く何所乃扉を開くや。其たる音宮中宮外やぐ音くや小造せむひき
 とも此夜小限りし些の音のせさるぞ不測なり。太子妃の教導小隨ひ殿裡
 を潜出むおの女宮女童を顧む。或樂苦小倚卧。或ハ調度ふもれ。就睡せし形
 さふがら木偶の如く。粧飾し顔を見おけられ。唯革囊小鼻穢を盛強く
 飾小紅彩を以て。薰らるる香草。或ハ以てのち。最浅猿とあうちむひつ
 辛く宮外やぐ出む。耶輪陀羅女を顧て。曰。偕老乃契。是まぐなり。丸修行
 乃功を積。正覚成道せむ。再び相見る期あふれ。老女不定乃世。累夫と豫期
 難。丸ふるまると母夫人小能仕。孝貞を忘りむ。更なれと。早立出んと。志むおを

妃忙し御衣の袖をさぐ。若君御入何國。行むを。劍山刀樹乃竟。さぐも自
 小伴ひむ。口絶絶も。泣き。泣き。太子首を振む。執著無明乃扉。火宅小苗
 て。此致心を焦せり。信心。使婆を出る。の劍煩悩乃絆を断。淨利小到る。よま
 歎たせん。より疾宮中。小回。夜明。後丸。行方を人問。唯。あ。と。答。む。と。心
 強。袖を拂。お。妃。猶。も。泣。き。放。ち。ぬ。され。羅。敷。の。御。袖。と。列。衣。と。妃。乃
 手。小。と。り。太子。公。扉。を。引。き。其。ま。廐。小。到。り。む。妃。片。袖。を。身。小。添。き。声。小。中
 泣。き。泣。き。ひ。か。斯。果。な。れ。更。な。れ。ぬ。泣。き。起。上。り。局。々。の。扉。を。と。の。り。て
 鎖。固。自。乃。圍。小。只。紅。泥。小。れ。心。の。内。を。痛。く。ら。る。斯。太子。廐。小。到。む。車
 匿。太子。の。馬。乃。在。と。呼。ぶ。其。脚。上。車。匿。が。耳。小。雷。霆。の。如。く。走。え。た。と。答。む。其。後
 起。出。太子。公。扉。も。り。大。小。致。た。更。お。所。を。と。と。太子。車。匿。小。對。む。丸。乃。首
 あ。ま。心。捷。陟。を。曳。よ。と。曰。車。匿。培。致。た。時。今。深。夜。中。出。遊。し。む。な。れ。何。れ。科。め。り。馬。を。召。ま。し。や。と。怕。る
 亦。四。竟。太平。無。事。と。逆。敵。乃。寄。る。ふ。ゆ。い。と。何。の。科。め。り。馬。を。召。ま。し。や。と。怕。る



く難なる太子を苛む小賢吏を中者ふ你ちらむや無常乃殺鬼攻
来る更速かり丸一切衆生乃為小是を降伏せんとも由を更を言ふ事
捷降太子のを奪出せよと責む車匿猶も首を振大王の勅をり太子
も夜中不出遊せんとも烏將軍の命を其後林門守傍乃官人小告よ
此旨小背く者六罪九族を夷えんと厳しく命を先烏將軍小違し後
御馬をもちるを敢て取ら承引を太子甚く憤りぬ你尚馬を奪いとあむ
丸煩惱の結賊を降伏し手始先你を殊を殺しと佩室室劍小御手成りけ
む心車匿戦栗し叫ぶ守傍乃兵を呼んとんも不側や一声も叫ぶ能り
茲小於己吏を得むと察乃駒を牽出して進せむ太子色成和けぬ手
網をとつとゆると乗る率方と喝令し車匿亦躊躇して曰君知召む大
王兼太子乃宮中を潛出む人更慮ぬ工匠命を城門乃閑閑なる度其
きる音なりて四十里小音くち小造りぬ且數乃監牢を置り時そり小守せ

むを争う激しく出むがれと中太子是を安むて天を仰り長歎しむ噫呼丸が志
願茲小到り空しくあまると曰と等しく空中小淨居佛あり緒乃苦垂来降りむひ
神通力を以て城の北門を開き固く大門已と閑然中一点の音せむ
監牢亦熟睡して不知茲小於太子歡喜踊躍しむ車匿を厲して城外へ出む
と城門より如く閑たり太子、宮殿を顧む獅子吼し誓て曰我若不斷
生老病死憂愁苦惱不還宮又復不能縛於法輪要不与父王相見若當不
思愛之情終不還見母夫人及耶輸陀羅女と斯乃と誓言を三年月任馴め
一金殿玉樓を捨思愛乃又母妻妾亦不顧狗をそやと檀特乃峯山嶺を
望み地を是は何乃為そ唯一切衆生乃煩惱を救ひ極樂浄土に引接せん
との大慈願なり難有る御發心を有る緒天の感應ましく太子乃
御馬乃前より持國多聞增長廣目乃四天王先逝し惡乃障碍をそらひ其
他羅刹天風天火天水地陽天金剛明王梵天帝釈迦羅密者淨光天飛行無辺自

在天抄。諸天太子乃前後を圍繞。神通力を添ふ。馬車匿も我志を雲
我踏霞段を今陸野道谷川道山陽道を唯一夜の間おちくと地夜乃明方ハ一座の
高山小著せむハ不測といふも疎かりきり

悉達太子純遺物車匿

斯く太子ハ山中の平なる所ハ馬が立遠近を眺望し。お目かね奇樹異草蔚
茂。香風吹そよぐ。四方ハ薫。霧千仞の溪を埋。雲萬丈の嶺を哀。寂莫
無人の場をれ。街心清々。歡喜ハ勝む。車匿を顧。仰々ハ如何や車匿承
れ。十善万乘乃位。唯是夢中乃栄花おひく。千花万花ハ眼前の塵埃。増て
や愛執妄念ハ煩惱乃薪。無明の猛火ハ燒き。更必せり。豈そふらうむやと
曰。車匿ハ官中出。より我。我を志。只忙。有無の答を。其方ハ
る所ハ人乃足音。おを嬉。や人を来り。檀持山。往。道。其方ハ
向。待。来る人を見。身。拈。木。鬚。髪。雪。欺。木。葉。を。編。身

小纏ハ朽木の枝。束。杖。肩。手。小異。花。筆。を。提。其。形。願
願。路。を。教。曰。老翁。情。太子。至。臣。を。眉。を。顰。是。ハ。胡。乱。者。ハ。無
道。無。慚。乃。姿。何。國。より。逢。抑。此。峯。と。纏。濁。世。凡。夫。乃。通。所。ハ
あ。と。三。藏。別。教。乃。靈。地。ハ。息。八。智。乃。声。聞。ハ。四。諦。十。六。行。相。を。行。門。通。行
乃。道。乃。我。心。十。地。乃。縁。覺。ハ。三。世。別。行。乃。修。行。を。行。十二。因。縁。乃。悟。を。證。因。位。果
位。三。昧。三。乃。道。を。行。又。緒。乃。菩。薩。ハ。四。智。四。滿。六。波。羅。密。乃。戒。行。を。修。清。淨
堅。固。小。行。ハ。三。摩。耶。形。乃。靈。場。無。上。菩。提。の。妙。嶺。乃。汚。穢。不。淨。の
形。乃。馬。乃。乘。鞭。を。揚。踏。わ。り。三。言。語。ハ。絶。惡。人。乃。疾。々。下。ま。令
と。太子。皮。乃。札。を。絶。丸。無。智。乃。凡。夫。乃。靈。場。乃。不。敬。の。罪。ハ。怒
む。先。中。乃。丸。ハ。心。大。願。有。檀。持。山。乃。我。心。修。行。乃。師。を。需。人。乃。王。位。と。捨
く。此。所。乃。来。り。願。ハ。神。仙。憐。を。垂。檀。特。乃。道。を。教。曰。老。翁。乃。定

你志ハ健氣カレども不浄ノ凡体を乞フ。檀特ノ法嶺へ登人と思由あり。此
 ながら遙々此所やぐ来き志乃ちありと云ふ。行程ハ教得きと云ふ。是より西
 十里のれむ上空其嶺ノ東ハ白雲林處を周リ。金光曜々靈山こそ你が尋
 ぶ法嶺カレと指示し。往還より太子少阿と列苗ハ斯祥ハ教示し。神仙
 ノ法名を承りしと云ふ。問ハ老翁チヨシハ我ハ是跋迦仙人なりと答ハ。應然と
 しく往還より太子御悦喜あり車匿を勵馬ノ口カと云。御身ハ歩も馴
 ぬ山徑を杖カもほぐたぐせも痛ハたふ今まハ假初ノ出遊ハ七密
 ノ室登車傳ハ前隨後從ノ官人非常を糺草ノ上ハ踏ハぶる御身ノ
 末世衆生を化度せん為。岩石裁々山々今登ハぬ然ハ五彩ノ糸履岩頭ノ為
 小破玉より清た御足ハ血泣きと云。路辺ノ草を朱ハ染ナし。歩ハ車匿ハ
 足ハ堪ハぬ。御馬小乗せむと勸ハれ。曾テ肯ハぶと痛ハる足を曳ハる。不
 嶺深く日ハ入ル所ハ一人ノ童子出来リ太子を乞ハ大ハ孩ハ是ハ何國ト云

来き者ぞ亦此山七佛出世ノ未前より開ケる。頭密二種の靈地中ハ牛馬ハ云
 中更ハ凡俗ノ通ハる所ナシ。北ハ雪山ノ峯續ハ南ハ陀陀淨嶺ハ。嶺ハ
 三條ノ法龍滔々ト落。麓ハ二流ノ靈河漫々と流ル。如ク溪ハ正覚化生ノ昔
 蓮華四ノ時を撫ハて花ハ嶺を過レハ。我ハ心門修行門涅槃門本覺
 門等學門真如門ト云。正道ノ秘門あり。されハ不浄結畏ノ法地中ハ三心具足セ
 ざる者ハ合登人ト思ハる。強ク登人ト云ハる。正法守護ノ猛獸ノ為ハ服
 甘ハる。疾ハ回ミ。云捨林處を去レ下リ。太子ハ是ハ仙家ノ童ナリ。思
 ハハ猶精々行程を尋問シ。御声を上ハ呼返シ。耳ハハ疾風ノ如ク
 往還カレ。せん。再び歩を勸ハる所ハ。嶺より入リ。仙人下リ来リ。金剛
 杖を太地ハ衝シ。太子ハ車匿を當リ。白眼。太膽凡俗ハ不浄ノ身を以テ何國
 へ往人ト云ハる。罵リ。其眼ノ光星ノ如ク。声雷ノ如ク。不車匿ハ肝消魂飛。路
 上ハ蹲リ。顔色如菜ナリ。太子ハ公然トテ。後ハ袖ハ合。乳ハ丸ト

大迦陀國迦毘羅城乃至淨飯王の息男悉達なり一度發心修行の大願を發し
宮中を潜出當山未だ願く神仙丸が微志を憐れ擅特山の行程を指示し
仰々ふ仙羽冷笑して曰你志健氣なれども五逆罪の身成ゆ争う擅特法嶺に到
るつた太子曰く丸生より必米生靈を殺む人畜成困む神仙何ぞ五逆の罪人と曰を
と陳じふ仙翁培怒り曰你母の胎内在り三年行住座卧の苦患を与ふこと無量
なり加之降誕し母を殺し刺へ大恩の父の意を背れ慈育の継母を害三人の親
宮三千の女官門護侍の監卒の息慢の科を及せり是十惡とも五逆と
も盛言する大惡人なり且其身の纏る衣服億萬の蚕を煮殺せ糸とて織生
木生草を枯く染りたる不淨の衣瑤瑤玉帶盡く人力を疲勞せし造り殺
たる汚穢の具なり奈何を衣鉢も小汚る你無上正覺の靈場不到る事を得べ
し真実發心修行の志ありんか懺悔滅罪して不淨の衣帶脱捨從者を追ふ
檀特へ到り荒ららふ云く身を翻して森林の中へ入るる太子仙人の絨を穿く

悟む車匿を顧て曰你九か劫を背む宮中扶出是れ後來り志を盡く
神妙なり然も今よ如仙家の法令あれは你是より馬を牽て回し佩る
七宝の劍を解頂の宝冠を脱髮中の各珠を把り授け此三品は大王不獻し
告よ須彌山より高た大恩を捨出家得道しこそ不孝の罪大いなれも母耶夫
人解脫乃為且一切衆生老病死の四苦を救入為なれを省せむと謝し
よとく亦瑤瑤を解脚衣玉帶を解て曰此瑤瑤公の母公不獻り多年慈愛の
深恩を謝し丸が正覺成道し都城小還り再び見をんむの遺物おんむと
よ亦此表衣玉帶八耶輪陀羅女と丸を念とせと又王母夫人不孝行を
ものゆへとヤと采心遺物を以て遺言託し玉を車匿公路上に伏し
幾し得ざるがよと涙を拭く太子不對ひ下官君の御幼稚より仕まり御出
遊する宝輦小添龍馬を牽一千余里の當山に隨從し今更争う此所
不捨よりて回りのを俯く願く幾心の御望を断都城還幸あつと大王おん

后官新宮の御歎をとりまむ。若るも御心不可いふを。只何國をも召具しむへ
 下官も君を捨ちり。都へ回りの大王其罪を責む刑戮を加ふる。口流る
 口流る。後怨を察の御馬健陸も膝を折耳成垂黄かる洞を流。頻る怨衣の
 を並殺。別を惜むる形なりを。太子道心を動し。公を声を厲して曰くや
 かし車匿承れ丸が母公の出産後七日より。薨じ。母子も猶別離あり況これ
 主臣をや。此別生別豈異けん丸が父天六。慈怨弟一の聖主なり。丸が故を以て何ぞ
 你成殊しむるを由か。使をよきんより。疾く遺物を持。回ると只も車匿の猶も
 御袖も引く。太子茲に於て。一方使を廻し。密劍を御手成。汝斯
 不利害を解成。猶抑留して大願を妨んと。や丸宮中を出し。時よ
 り。幾心修行成就せん。誓言宮中より。又王母夫人不見。誓なり。你在
 具せ。檀特山に至ると。能く。到る。志願。茲に空なり。今。劍を伏せ。死を
 かり。已不抜放さん。車匿大の小孩。御手を抑。是。誤り。御遺物。賜り

都城。回りの。免させ。と。謝する。太子より。劍を捨む。疾く。回せ。よ。丸も
 学道成就せん。你も。健陸も。成佛得脱せ。心強。跡。振捨。檀特山。今
 登り。車匿。足を翹。御後影の。見え。見送り。声。限り。泣。馬を
 不。上。泣。御遺物を。馬。鞍。結。付。綱。牽。を。馬。由。太子の。御背。と
 顧。數。聲。嘶。涙。を。流。雨。如。車。匿。倍。感。慨。情。を。歎。類。御。別。を。惜
 馬。の。背。抱。着。雨。と。泣。果。事。得。主。馬。を。曳
 怒。甲。殊。勝。亦。衣。なり

迦毘羅城強動車匿歎遺物

却。説。迦。毘。羅。城。不。其。夜。明。後。宮。の。妹。女。平。日。乃。如。朝。淨。太子。乃。寢。殿。お。あり
 見。小。例。ハ。子。お。臥。寅。不。起。今。朝。日。已。高。登。り。た。る。小。尚。帳。を。垂。音。な。お
 せ。れ。た。是。ハ。脚。不。例。心。發。た。三。新。宮。不。斯。と。告。小。耶。喻。陀。羅。女。其。身。ハ。小
 心。苦。思。尚。顔。小。強。増。や。鹿。野。瞿。陀。彌。の。二。女。殊。更。か。ら。た

三女い〜寝殿入〜錦の厚衣あれも唯是脱の蟬乃如更小太子在
これ各恫果〜強ま〜是ハ何國へ行幸〜殿中の間〜届〜造
搜〜れと刀えあ〜益強〜嬌曇殊夫人不斯と告不何〜たあ〜た
其終其所不伏声成悲〜泣〜是成〜二新宮〜千乃妹女五百の重女一
育不泣怨む形勢天人の五表を怨む一般〜鳥將軍不斯と度〜狂氣の如く其身
殿中成弛理〜搜せも御影不れを太の氣を苛鳥陀夷を以て王宮〜奏聞せ
自身八四の監卒を檢〜外吏下司成改〜車匿と捷陟〜え〜借馬上〜
潜出〜せ〜忙〜居〜鳥陀夷と息を限り小王宮弛恭〜大
子宮中成潜出〜せ〜傳奏小就〜奏〜浄飯王是を皮〜等〜昔と
叫ぶ昏倒〜女官近臣強た強〜急不藥湯をより抱〜進を内三大臣〜月
御雲客追々史傳〜弛恭も更絡繹〜て引〜迦毘羅城中の強動鼎乃沸不
異が〜と上成下〜浄飯王二時〜過〜息吹〜下〜御泪泉の如

く更小人更を弁〜休〜三大臣〜大王太子成追慕〜の睿慮を惱〜
ハ御理〜遠〜往〜早〜罗追人乃兵馬を〜むけ還幸〜
と只拵〜練〜浄飯王〜睿慮を鎮〜先月景殿〜御幸〜
〜密鞏小乘せ〜官人是成昇〜先〜進〜諸臣御後不隨〜月景城渡御
〜嬌曇彌夫人〜二新宮を從〜龍駕を迎〜玉王座〜清〜龍顔不對
〜左右乃御討〜唯伏沈〜泣〜大王中瀧津洞をと〜
〜稍〜御衣乃袖小洞を抑〜朕無〜太子が出家学道乃志あると
知〜新宮〜妹女兒童不至〜太子を怠り〜守護〜と命せ〜何
故不更〜及〜紹〜鹿野瞿陀弥乃兩新宮大不恐〜入洞を止〜奏〜
〜妾亦〜の女官と俱〜終日終夜太子乃左右侍〜此も怠り〜後
〜宵〜耶渝陀羅女寢殿不参〜多〜物結〜心安〜何何の程
〜潜出〜精〜耶渝陀羅女不更回〜答〜大王〜耶渝陀羅女

小太子の行方を向ふ。妃は自ら導きたり。更に分れども。今更明白も告ぐ。面を赤く
 せしむ。妾夜に寝殿に糸り。四方公乃物落り。進せしむ。小何是の書と云き。これ
 よと仰言あり。小何は。御前を去り。書車の中を尋搜し。幸して探出。献りし。小
 九此書の中不就て考る事あり。退きて後刻き。早より。退きて寝殿の在の向
 小侍ひ。小平日ありて。睡萌。我をを夢を結て。宮中から出さる。知侍を怠り。罪
 謝し。も。人言の葉のゆき。速に刑む。と。されども。大主歎息し。小新官妹を怠慢
 乃罪誣。と。と。金是。云。帝。起。た。た。女。重。なり。四門乃監卒。何ぞ。太子が深夜。不出。と。知
 ざり。と。と。鳥將軍を。分。く。嚴。く。結。向。を。せ。し。む。四門守。防。の。者。も。恐。ま。入。前。夜。不。限
 睡眠。萌。と。堪。ぐ。思。を。守。防。を。怠。り。し。小臣。ホ。遠。く。り。此。上。如何。を。嚴。科。す。も
 行。せ。む。と。口。を。さ。す。く。や。あり。鳥將軍。と。て。あり。此。旨。奏。し。れ。ば。淨。飯。王。也。果。玉
 此。上。六。更。追。兵。を。向。と。と。二。千。萬。乃。馬。軍。を。東。西。南。北。道。不。分。ち。太子。乃。御。行。方
 を。尋。搜。し。し。む。此。更。も。民。回。末。と。す。く。老。若。男。女。大。小。強。弱。食。を。忘。ま。業。と。

捨。方。小。奔。走。して。泣。叫。声。四。境。不。分。ち。る。許。方。り。斯。く。數。日。過。り。東。南。西。三。方。乃。追。兵。と
 手。成。空。と。り。回。り。多。る。不。北。方。向。ひ。兵。車。匿。と。捷。陟。を。牽。く。回。り。王。宮。の。廣。庭。不。曳。居。て
 云。々の。旨。を。奏。達。と。淨。飯。王。車。匿。を。見。む。ひ。く。逆。鱗。は。よ。く。如何。や。你。無。く。朕。余。命。す
 法令。を。守。る。と。太子。を。し。て。城。中。を。潛。出。し。し。今。何。の。顔。有。て。り。主。を。馬。を。牽。く。回。り
 る。や。其。罪。牛。裂。す。と。も。飽。く。と。も。太子。何。國。へ。去。り。せ。し。速。不。行。方。成。告。ぐ。と
 責。む。車。匿。恐。入。り。奏。と。と。と。下。官。前。乃。夜。熟。睡。し。し。小。深。夜。呼。覚。と。声。あ。つ。く。雷
 霆。乃。如。く。維。中。と。起。出。し。し。思。ひ。し。と。太子。を。渡。せ。し。疾。捷。陟。を。牽。く。と
 曰。下。官。最。不。審。因。深。夜。を。御。出。遊。乃。何。を。將。又。太平。無。敵。を。征。伐。し。し。と
 逆。徒。を。い。は。し。し。何。の。科。ふ。御。馬。を。召。れ。し。と。難。を。い。は。し。し。小。太子。曰。く。你。を。し
 む。魚。常。乃。殺。鬼。責。來。る。と。速。かり。九。二。切。衆。生。乃。為。小。是。を。降。伏。せ。ん。と。早。く
 馬。を。牽。く。と。責。む。下。官。尚。も。大。王。乃。法令。乃。嚴。か。り。と。鳥。將。軍。小。通。達
 せ。後。御。馬。を。牽。く。と。取。て。省。し。む。と。十。計。尽。く。守。防。乃。監。卒。を。呼

人為声をよき叫んしゆも声出されを止せ不得。寮の御馬を曳出して進
まらふ。太子早く馬召召後不續よと仰、乗出り自ら来ふ似む捷陟一
声も嘶きど喜も鈴も敢て鳴き。大地を踏車いと龍馬の蹄も。只空とむ
歩むが如く小ひいた尚それより不側りも兼く。閑閑乃音平里の外小音く城
門已と閑たぐやの音もせむ。それより馬も下官もきて急ぐくもはる夜の明
る頃小八座乃雲山小暮後小承りり心此都城より異小あらう。千三百里の
行程を備。檀特山の端山より。是凡斐小い。諸天の威神力もく太子を送り
むひふことを恐る。奏しそれ大王も。後宮新宮緒御まぐ。半信半疑ひ
只黙然たる許方り。稍有く日光臣車匿小向ひ侍太子小随従。遠境へ到る
何と捨置まう。鈍々と回り来るやと咎む。曰さ小件乃雲山到りひひ
仙公何仙重く。出来り此山谷鉢几夫乃来る。所方を疾を回よと喝ひ。も
太子敢て屈し。玉冠を解き。玉冠髻中乃珠を解き。曰く此三品大王小献り。在が学

道成就。再び龍顔を拜し。ももか乃遺物小んを奏し。不孝の罪を謝し。もも
よく仰せ又瑠璃御衣玉帯を解む。瑠璃八母夫人なり。是も不孝の程を謝し。も
表衣と玉帯ハ耶輸陀羅女遺物小とす。去去ん。衣を下官御袖をひ入り。も
深山小争り君成残し。たもも願く。悲念の御望を捨て。王城へ回りに。尚
還幸乃脚心かくん。何國も召具し。再三再四願もれ。曾く許し。もも休
く丸が意不背。後心修行の妨成を。今今剣小伏く。死をせり。已小密剣小手
をひり。已事得む。領掌。脚別を生。面り。小尚も緒天乃加護小や馬
も下官も虚空を飛く。千三百余里を不目回りに。唯何更も天力小。罪を許
させむ。泣く脚遺物を捧ぐ。捷陟も膝を折涙を流して。悲しげ小ど嘶く。橋曇
彌夫人耶輸陀羅女車匿。物語を。遺物乃品を負小抑當声も惜ま。泣むへ
を並居る女官緒臣も。俱小愁涙を止る。浄飯王何と。思召入。突然して坐
成起む。やれ車匿其馬是。全作と。紹車匿か。是ハ何の科小御馬を召させむ

小女心小絢り頓ちり奉得と月光臣大王小對ひ君今馬を召て何國へ御幸あり玉
 と同もる王声を曇りて宜く世上乃親心貴も賤も子成思りぬ者やある形醜く
 才拙れ子成が小愛慈なりひり多小増て況朕が太子三十二相十種好具足せし耳
 かりと天文地理算數書画舞樂弓馬抄よひ萬藝小達し智古今小秀筋勢
 大天下小敵かり然る小今虎狼蛇蝎の極る深山幽谷小令道を修むと豈是を
 他小んる小忍人や太子在るとん博論王乃位北斗を支る富も何すせん朕も其小
 今登り太子と俱小道を修し艱難を一致し死生を交むとんれかりと宜旨ある
 月光大臣色を正しく曰是如何なる勅掟や君此國を捨むる惡想賢王より連綿
 たる血脉断絶し博論王位他人乃有とかりく萬代乃未すく不徳の跡を遺しよふ
 たり臣孰考へ小太子学道乃期望ある事一朝夕の義してはまじ故奈何とれん
 耶夫人御懷妊乃とん相者やせ勘文とん太子降誕乃同三十四乃瑞應現し七歩
 小して獅を吼り金三言小も三世了達四弘誓願緒法塵内天上天下唯我独尊と自ら

一城以て世榮を樂むとる更明り且十九才小なり色更近女色を親看ありと御
 出游乃路上小老病死乃相を示ををんと總く不側の更妻し今亦車匿の奏する
 を以て考れを城門已と兩た二千三百余里を半夜乃内小到りよ更緒天の擁護
 かり更疑り假令深山幽谷小任しあすも猛獸毒蛇の害を如る更能まし俯て
 願く小睿慮を者むひ太子乃御運を天小任し学道成就してたつと色更討節を
 待せむと約を掲してと練る浄飯王其練奏小睿慮弛とん実汝がや所も理
 かり故夫人が夢想とん是迄乃奇更を考れと太子小朕が子小と朕が子あり
 と真小佛菩薩乃再生かるぞと然も朕尚愛慕の念を禁むとる更能むと
 朕年已小老小臨と難陀いま幼く余小王位を讓るる者なり是を奈何と
 くとるは月光曰難陀太子御幼稚なれども聰明睿智なれと太子小立更と
 維く不可かりととづれ且大王いま老一とよすあつと何ぞまの睿慮を煩ハ
 ぶつれと日光星光ととも小種を練奏しとれと素り賢明乃浄飯王臣下の練

不隨たつぐひ御幸ごきやうをともまうまふくくくも猶なほも睿慮えいりよ穩おとかくと智勇勝ちゆうゆうすたうき一臣下五いちんかご
 人ひとを擇出えらひだしし糸殺いところ結帛むすを下官げくわん小運せううんかせ車匿くるまかくを教導おしなすとて遠とほく檀特山だんとくせんへ到いたせ
 ぬも雲霧うんむ遮さり隔へく登のぼる更さら能あたはかれを衆人しゆじん空くわしく王城おうじやうへま回りまわり斯すと面奏めんそうし
 ころ小せうを大王たうわう后宮こうきゆう新宮しんきゆうも大おほい望のぞみを失うひひ其身そのみハ宮中きゆうちゆう小せう在ませも心こころ檀特だんとくの
 嶺みね小通せうとうひ天津てんじん空くわうくく鳥とりを羨うらやみ風雨ふうう霜雪そうせつ小付せうつけても御衣ごい乃の乾かわくひまはかりりり
 実まことや上かみかく怨うらみした生別しやうべつ小増せうぞう者ものあらじと右みぎたせより言傳いひつたんも理ことわり方かたりと知しききり
 悉達しつたつ太子たいし於檀特山だんとくせん師し阿羅あらか々々仙せん

却さか統しゆ悉達しつたつ太子たいしハ車匿くるまかくを回まわしし心細こころこ痛いたむる脚足けつそくを曳ひ檀特だんとくを志こころしくたり
 行ゆきし小せう若じやく箭せんも茂林むりん小看せうかんむひ息吐いきつく林中ちゆうをみ入いれる緑苔りよくむむと岩いわ乃の上うり
 端座たんざ結印けついんせら老翁らうおうあり頭かう小須せう彌みの雪ゆきを頂あたまた面おもて小滄海そうかい乃の波なみをたと木きの葉は
 衣いを身み小纏せうだんひ眼がんを用もちく寂莫じやくばくとり大子たいし心こころ小思せうしふく是これ必かならずとて我われ心こころ乃の師しをたとと
 小せう俊しゆんとと入い草くさ乃の上う小座せうざ一いち稍せう久きうく待居まちゐふ斯すく一時いちじ余あつありく老翁らうおう眼がんをひりた

太子たいしをたとと曰いひ何者なにものかれ不淨ふじやう乃の肉身にくしん也なり我われハ靈場れいじやうハ来きりととと太子たいし答こたへ曰いは
 中天竺ちゆうてんぢゆく六伽陀りくかた國こく乃の主淨飯王しゆじやうはんわう乃の子悉達しつたつ也なり無なく慈心じしん修行じゆぎやう乃の大願たいがんを懷いだた宮中きゆうちゆうと
 潛出せんしゆつ師しを求もとめ為なる遠とほく當山たうさん来きり願ねがはし神仙しんせん乃の法名ほふなを承うける人ひと老翁らうおう曰いは我われ檀
 特山だんとくせん法性ほふじやう淨じやう臺たい小行せうかうひととと阿羅あらか々々仙せん乃の法名ほふなを承うける人ひと老翁らうおう曰いは我われ檀
 凡夫ぼんぷ乃の身み難行なんかう苦行くかう捨身せしん行かうをし遂つひる更さら能あたはかれま只ただ速すみくま回まわりし太子たいし白しろ九く膚患ふわんあり
 と魚うい子し道だうの為ため小身せうみを抛なげ上う菩提ぼだい乃の首くびを究きゆう一切いっけつ衆生しゆじやう乃の生老病死しやうらうびじの四苦しよこハ救すくん
 更さらを欲ほしし如何いかん乃の難行なんかうをし修しゆしし願ねがはし神しん仙せん乃の法名ほふなを承うける人ひと老翁らうおう曰いは我われ檀
 道だうを授まけし身みを平伏へいふくく阿羅あらか々々足あしを礼らいしし仙せん翁おう曰いは然しかれば你みが其その穢しくも衣服いふくを
 脱捨だつせつ仙家せんけ乃の草衣くさういを著ちやくせし茅菴まうさう乃の葉はを編綴へんていしし衣いをまとと太子たいし悦よろこむし著
 たる羅敷らふ乃の下衣げういを脱だつてし漢かん投捨たうてつ得とくる所ところ乃の草衣くさういをまとと脚身けつみ小せうままとと仙せん翁おう
 見み中ちゆう乃の色いろ成なり和わげ善哉ぜんさい女にょ年ねん你みが徒弟たふていとなる上う六りく父母ふぼ乃の号ごうたる凡俗ぼんじやく乃の名な可かまり今日けふ
 乃の瞿曇きくたん汝に弥みと呼よぶらなり勤つとめて薪水しんすい乃の勞らうをたとと仙家せんけ乃の戒行けいかうをし持もとと命いのちをまとと太

子諾て又向む。仙家乃戒行。何かる更をう。行いなる阿羅。曰先如法戒律定戒
 心地無為戒。不生三昧戒。六根清淨戒。此五戒なり。是より三つ別行する。阿羅戒。每小
 十戒あつて五十戒となり。五十戒又一戒。每小十戒あつて五百戒となり。其五百戒又一戒。每
 小五戒あつて二千五百戒となる。是を自律戒。律戒如律戒と号。三種持戒の仙法之
 も。二千五百戒の中戒。破らざる。破戒無慚の罪人なり。無為乃修行なり。難。你
 此戒心修行を。遂んと欲せむ。慎て持戒せよ。食肉提樹の菓。一日小三粒を喰む。
 一粒を増喰く。心許さざる。嚴小示。教先菜を摘水を汲き。これよ。藤とて
 造るる筐と大なる瓢。我とたり。太子師乃命。受林中を。出く山。成。四り。東西南北
 我尋求。求む。敢く菜。あつて。猶普く。尋。廻り。み。適。乃。溪。小。若。菜。生。る。然。ども。絶
 壁。屍。風。を。卒。る。如。下。る。が。た。便。な。れ。を。忙。せ。て。停。ま。む。ひ。師。の。待。て。む。人。更。を
 恐。を。樹。根。小。と。り。藤。葛。を。手。繰。て。よ。く。下。り。若。菜。を。摘。と。り。筐。小。入。亦。切。岸。を
 攀。登。り。ゆ。ま。さ。も。羅。綾。小。纏。れ。荒。た。風。小。あ。り。む。さ。る。脚。身。乃。る。惡。所。を。登。

又更れ。れ。荊。藤。乃。為。小。手。足。を。刺。し。樹。根。岩。頭。小。肌。層。を。破。ら。れ。む。ひ。雪。より。清。た。脚
 肌。も。虚。子。ま。ら。ふ。血。小。染。む。痛。り。く。る。然。ども。太子。此。も。屈。し。む。公。を。岩。間。げ。む
 小。又。溪。川。下。り。瓢。小。水。を。汲。り。兩。種。を。携。て。林。中。四。り。師。小。供。と。も。阿。羅。々。仙。是。と。見。て
 小。あ。れ。瞿。曇。水。成。汲。小。浮。水。乃。法。あり。菜。を。摘。小。三。持。乃。道。あり。你。心。得。く。菜。を。摘。水。を
 汲。き。く。り。く。る。と。向。太子。曰。弟子。い。ま。是。を。不。知。只。師。命。小。後。ひ。取。来。り。阿。羅。々。仙。初。此。を
 一。く。色。を。並。殺。して。曰。夫。水。小。赤。竜。青。龍。白。龍。三。つ。の。主。有。く。兩。露。を。絶。一。草。木。生。靈。是。小
 依。て。生。育。する。更。を。得。る。を。何。ぞ。猥。小。汲。滅。と。れ。上。三。業。中。三。業。下。三。業。と。号。け。金。剛。輪
 正。教。論。持。明。論。此。三。昧。を。修。一。三。龍。乃。德。を。射。て。後。汲。な。れ。り。亦。菜。小。陽。性。陰。德。現
 成。く。三。乃。性。命。あり。因。助。業。三。昧。雜。業。三。昧。正。業。三。昧。以上。三。昧。を。修。一。三。光。輪。を
 を。報。て。摘。是。敬。命。乃。供。養。たり。然。る。小。猥。小。摘。取。と。無。道。と。も。不。法。と。も。云。ん。方。わ。り
 破。戒。の。罪。思。ひ。ま。れ。と。喝。一。遮。那。金。剛。杖。を。お。と。り。太子。乃。頭。上。肩。背。乃。嫌。り。丁。を。と。り
 擊。と。り。傷。た。疲。む。ひ。太子。若。と。叫。び。什。を。阿。羅。々。仙。尚。も。連。々。小。擊

阿羅仙人
悉達太子
牧羊之圖



く身命を抛ち阿羅々仙小仕へく檀特法嶺小苦行しむると三年乃月日と送
むふも是何乃為と名御身乃榮花を求むふもあらと不老不死乃長壽と
望むふもあらと末世乃衆生を利益せんとの大慈願の最難有御更なりと

采心達太子於般若甚師伽羅々仙一

斯く或阿羅々仙太子小對ひ此三年が間晝夜乃修行懈怠なれふより五濁
乃垢も去五逆乃罪も消へ実母亡耶夫人得脱し上畏乃仙女と産生遂小八帝
釋天乃后妃小備るるを正覚成道乃後自然相見する期有ふ人此上無定
乃室般若法甚師到り伽羅々仙を師と無為学道乃秘訣を学究ゆと精
教導有るれむ太子欣悦小勝むと年来乃高恩を謝し別を告ぐ檀特を立
出む小般若甚師今登りむふ伽羅々仙無く是を知半途小出迎へ照普比丘ま
る更何と違やと呼りたり太子發れむ忙しく跪く仙翁乃足を礼し諸伽羅々
仙小くせむふ願く八無為正覚乃妙道を教授せむと曰ひれ伽羅

々仙曰你照普我此道場の戒行小頭秘密清浄密とく三密瑜伽乃修
行とく言結不及妙曲なれむ甚く行ひ安くと汝とく行ひとるや否やと問
太子拜伏し玉の弟子法味を其介と世榮を欲せむ無為学道の為ゆと
身命を抛ち如何なる難行成り修行小と答む伽羅々仙善哉と賞し室小
伴ひ照普を改く妙舍利仙と呼緑乃脚髪を剃む藤の太布の法衣と与へ
偕教く曰此所乃修行小因位果位三昧とく三身行ひ有亦虚空無為湿槃無
為真如無為とく三無為乃行ひあり亦不變真如実相真如隨縁真如とく三
真如乃行ひあり以上三々九品乃修行不可説不可得の心地小く其修行最難
仙食ハナ河蜜蘭樹乃菓木檀子と号むる者を一日小一粒服し一滴乃水成り飲こ
成許さむ此峯より巽乃方三里彼方小聳る嶺を六伽遮耶山と号其山小靈泉
あり妙法泉と云り其滝乃源小金剛窟石とく平なる石ありそれを坐禪乃牀と
しと二百日坐しと乃修行敢く起し成許さむ二百日までの修行敢く坐する更

を許さむ。二百只伏るの修行敢て睡眠を許さむ。行乃内小思念なく。行乃内小言結
 なく。行乃内小心を。是自然不生乃行相かり。慎で怠る妻ふくれと指示を太子師
 命を領掌し。六伽逸那山小攀登り。滝乃源を尋く。金剛窟石の上小到り。三密
 乃行小入。痛くひひ日小木檀子一粒の他。水をぶふ飲むふれを。さくも白王乃く
 かり。脚肌も日小黒。風小荒。唯枯木のく。瘦衰むひか。三伏乃其の日も冬暑
 忍く。苦行。嚴冬の雪乃夜も寒。苦を堪。難行怠。精神を厲。行
 とも。むひひ。余りの困行小身。身倦疲。思を。睡眠を催。むひひ。何國よ
 とも。なく。二人乃天童。睡居。太子を。曰。是なる汝。彌法衣を身小纏
 ひ坐。禪乃。牀小在。無明乃。睡魔小犯。戒行を破。是法賊。い
 や縛。んと。太子の手。背。曲。強。縛。太子。後。覺
 玉。猶。深。せん。目。居。小。重。子。繩。乃。端。を。傍。枯。木。の。枝
 小。鉤。上。鉤。下。其。度。太子。腕。折。折。如。疼痛。小。堪。絶。死。小。天

童水。水。灑。糝。亦。呵。責。吏。前。信。と。太子。余。の。苦。声。を。並。殺。て
 身。乃。罪。を。懺。悔。せ。思。召。多。亦。思。之。不。師。乃。緘。小。行。中。言。を。並。殺。と。吏
 戒。禁。小。む。を。可。む。法。乃。為。小。責。殺。と。何。を。露。の。命。戒。惜。を。と
 猶。青。苦。忍。ひ。て。あり。ま。と。天。童。相。り。て。曰。此。汝。彌。是。法。賊。小。あ。と。真。の
 修行者。今。縛。を。免。得。ま。と。樹。上。り。鉤。あり。繩。を。解。坐。禪。の
 牀。小。置。進。何。國。と。去。小。り。太子。初。て。悟。む。是。緒。天。丸。小。懈。怠。を。緘。小
 小。と。天。童。乃。後。を。礼。拜。あり。倍。精。心。を。厲。難。行。苦。行。と。三。年。小。及
 り。伽。羅。々。仙。太。子。乃。勇。猛。修。行。を。了。續。歎。你。已。不。信。心。堅。固。小。戒。行。せ。此。上。ハ
 雪山。小。到。り。毘。羅。梵。志。仙。師。陀。羅。大。師。耶。仙。二。乃。道。師。小。事。正。覺。成。道。せ。你
 小。此。二。語。戒。授。を。法。論。密。錫。杖。妙。真。大。伽。薩。如。意。を。授。脱。曰。此。錫。杖。を
 解。化。衆。生。乃。功。德。を。是。を。策。と。蛇。毒。蛇。惡。獸。害。如。を。緒。虫。音。を。空。道。と
 避。小。足。下。小。殺。生。戒。を。破。む。如。意。小。神。力。自。在。の。法。善。小。て。虛。空。飛。行。の。功。力。あり

是より雪山へ赴くは廣野道谷川道山頭道と種々の難道多し信力堅固より

〜到りぬと教示しこれ太子歡喜斜方と師恩を謝して雪山へ赴むひかり

天女靈鬼告因位之善惡應報

斯く太子加羅仙別名左如意を把右錫杖をけり鳴りて廣野道と徑

の路を過す所小念生南方より黒煙渦巻来り焰頻々燃立上漸々不近くきこる

小何更申すと傳主と申す炎乃中より無數の餓鬼頭を出り其形黒瘦く

枯木の枝乃如く骨を露し腹のど大いして眼色憔悴したるが太子を拜して怨良乃

声を出し給る事有か如太子憐れむ一念不生罪福無主本来空無我諸法実

相一切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と唱むを不測や猛火忽然

と消く五色乃祥雲と雲無數の餓鬼と見えざるも端嚴微妙の天人と現し當

来作佛曰生佛果と曰音小唱へ光を放り虚空より太子此瑞應を大に歡

喜しむ猶も安ん進む一場の墓原小出むいしがあま堆の墳乃前小端麗乃

天女香成焼花を供し礼拜し居る太子不思議小思召其故を問ふ天女答

曰く此所は彼方小茂る杜の中なるが部伽耶の市乃墓所也我身は或市人乃

子也といひ三年前小死去に曾て世在りて三宮小供養し六親小孝順り

眷族を惠み憐れむ其福力小依り上天乃樂暇小生を受緒乃樂を極りは是も

前生乃善心乃を所りれ此古墳乃下なる因位乃形小香花を供しはなりと答

太子史召く感歎しむ其所を過往す所亦堆乃古墳乃前二頭の惡鬼在

り墳を護た土荒し古骨を取出て眼を瞋し焰を吐けけ嘴碎れ亦探りて

とてお出推た居り太子見むい何れをうは惡業をなると問ふ惡鬼位て

答曰我前生は部伽耶の市人なり生得愚痴邪惡して今盛なる成妬

人乃養ふ公侮り親を疎し疎を欺り其惡報小依り今生るも鬼畜乃生と

受日夜緒乃苦患をふむるを因位の枯骨も恨り斯るく墳を護た骨

成碎たゆかりと各太子嗟歎しむ善悪應報の速なること如斯恐るる如く
金剛合掌しむ生死去来即是如夢諸法徒本末常寂滅相故以善惡不
二邪正一如自然真無為と唱へた伽薩如意を一度揮むと光明虚空赫々
靈鬼も天女も歡喜太子を礼拜し光と俱に飛去り斯く太子其所に過て
道は急たより程は稍雪山の近はと覺く岩頭氷凍白刃乃如く満山雪も埋
まると銀世畏れも縋はる寒風肌骨徹り冷氣皮肉を裂むりたれど殆歩こ
びく女内樹下も傳ふと然ふ天の淨居佛太子の心を厲さんと一人の樵夫となり
椎柴を擔ひまきとるふと太子悦びむ如何山人是は雪山へ赴く修行者も
あまりの大雪ふく前後を弁せ何卒雪山に登るる路を教てと仰くも樵
夫笑ふ白不惜身命乃汝門く是をり乃雪何ぞ往煩やそれ此山緒天擁護
乃嶺より三光秘事の苔乃道緒佛正覺乃其堂より三乃峯弥高く微妙
不斷の法を示し汝汝亦もや金剛力乃方便ハ堅とも更も動むる更なり長

夜の燈かりと魚己身の月明かりを雪と玉の光をれ魚鱗ハ氷成りく柵と舟の
餓鬼ハ水を見く焔と天人と水を令く瑠璃と人間ハ水を令く水と是成曲見
不同と縋り其如く此雪も外道寒れ雪吹と々々手足凍五躰と悪魔ハ刀劍
と々々魂を消し心成恐む佛菩薩ハ法の英も々々下化衆生の慈怒成垂ゆ
是成法地乃三見と縋り厲やく修行者と々々雪吹ふまをれ太子忽ち悟
むハ河薩薩如意成揚く虚空を指業雲無碍如虚空本虚隨知ハ河田頭
行と觀む身乃先り忽ち身軀の凍忘られ行歩心の隨ふなり漢を超峯
を攀遂小雪山の法基ふたり看む脚飲ハ限なり

耶輸陀羅女生若官

却説ナ迦陀國伽毘羅城ハ太子出塵乃後々まがも淨飯王憍曇彌夫人其他
新宮女官百司百官下萬民も思出結中怨の泪ハ袖成朽さぬ人もなれ中
もよんて哀も痛ハ耶輸陀羅女乃御身乃上方り太子別離ハ臨其懷を指

ざー三年の後九種を生ざり仰ふも別離の怨ふまればおろげの更お思召
 々ろふ二年冬乃頃より何となく心地例なき目増胎内物ある如く覚ひり
 心を困りまへも人お云あをともよも絨とハせと深く包隠しおあはけるも太子
 の御事お忘る遺物乃御衣と彼片袖を身お添へ唯帳内お引籠り世茂憂物
 お歎たきしあやう衝ふ脚腹ぬくふなり包とこれと女官童女お是茂知此所
 彼所お寄ごりひも絡合るや太子宮中をお出ひごり已お許すの月日おあ
 けふおかゝ重た身おかりお何者おたづね如何なる草の種中へ人おあけおけ
 お云おと忍びた此道おとと潜言やふ此更なや月景城おくれを耶諭陀羅女
 密男あつて此頃孕あひり其其維う渠くと云觸果ハ橋曇彌夫人の生健
 是ハ異の風統ふ自然大王の唐お達し脚不審を蒙る何と陳むと心
 強だまひ耶諭陀羅女の新宮お到あひ人を拂ひ密お懐妊の虚実を糾お妃を
 只顔お紅葉しごうむらわらるる包ひとこれと申後たう斯とろ一召くも

何れ隠しおたれ太子のま宮中お出まはる以前幾心修行の望あると成結おひく
 右手の指ゆる妻お懐を指おひ三年の後孕と有る男子を産た是九が遺子
 かねを慈と育よと仰れも只脚別の慈とふ絨と八思をさむと只管お出離の御望
 お止りなれも遂お諾まて宮中お潜出させまひぬ其後ハ深た歎たふおたれ其
 御刻お忘る侍お年月至り心地例なき目増身重かりとておたれあぬ憂
 名と叫ぶる身の怨と推量せむと絡り身お伏せ泣き又橋曇彌夫人おひて
 奇異の思をかり年信お疑ひさす其と奏せしめ自の御坐お回させ
 玉ひ鳥將軍の妻お歎く耶諭陀羅女お物絡のやうお娘の更を奏せさせお浄飯王
 訝り玉ひ太子お権者あく未生前より衆の奇特おたれさる不測乃更絶た
 とハ云難をれも三年の月日移りお娘とる更疑ひおたれお宮中へ出入する男子
 を来心く結問とさしと命お鳥將軍が妻お命を領掌しと三回夫人お斯

と達しるを耶輸陀羅女仕る女官より新宮仕る者を一人召寄す同乳
よす物弁ぬ女乃か己が隨思すなり言成すおの實言とも虚言とも紛然と
今ちがくせんまなて捨置きたる小遂小臨産の時きり王乃如た男子降誕ある
羅睺羅尊者とて此若君なり太子世小在る密位成受嗣むひの御子なる満朝
乃百官緒乃王より慶賀の使者門前小市をなるとは難有て是成祝する者な
く却く種々小純緒する小耶輸陀羅女乃心くさ確言なり世成あはれたる物小思
ひ弥引籠り居る心ひよる若君を太子乃御遣子と撫傳憂か中なる樂草小
生しよふあも他の人さも思を主ふと捨種よと無下小見ぢくはやく坊
来る人もたれやふなりとて世小云甲斐なく明暮しよふもあはれ此若君乃成
長しむる母子亦連いふる深山幽谷成り尋ね一度太子小見しめまるとせまると
よふあはれあはれ月日を送りよふ脚心根ぞ痛りうらむ

悉達太子苦行雪山降魔軍

再統悉達太子ハ嶮岨絶壁を徑り雪山乃法臺小歩する者所小一人乃異人樹下小
端坐し。妙舍利仙我汝を待と久しと叫りぬ太子此人を見む心鬚髮悉く黄色小
て两眼乃光り明星乃如。顔色薄紅なる木の葉を藤乃糸とて編綴たる法衣
成穿ち手小一條乃如意をとり太子思ふは是必と禪羅梵志仙なる人にて
袖小合せし礼拜しむし仙意の如く弟子ハ妙舍利小願くハ神仙無上正覺の教を
示しむと曰仙翁白善哉妙舍利我を禪羅梵志なり。抑此峯ハ緒天守護乃靈
地也。東ハ九織本覺基臺西法性妙覺基臺南ハ妙織等覺基臺以上を雪山乃三臺と
謂り。不惜身命乃難行とを常參日中放參と。一日小三行あり。遮那金
剛部三昧般若蓮花部三昧寂靜佛部三昧と。三業九品乃勤行一日中懈怠と
るて成免すと基臺より臺まで十里乃行程あれを合せく三十里偕此室を号て北
真禪定基臺と。朝小出く夕小此室をく回リ。夜ハ石上小跏趺坐し。定心淨心寂
然心妙真心真無心此五定心を煉く緒天小飯命せよ今日より妙舍利を改く雪

山園利と呼ぶ。然るに一点も怠慢の心を生じざる。更なれと教諭し。臆然として虚空を歩み去り。太子其後を礼拜し。此は是より日々小三業九品乃勤行をなす。三臺を行ひ廻り。其道路悉く雪降積寒風乃厲。其地を覆ふ。行廻り。一日由白日をみる。ことなき。氷凍く。劍より尖た岩角を踏まけ。行廻り。日々小四里。夜北基小回り。坐禪乃牀小睡を凌ぎ。終夜緒天小般命。其素乃火を焚され。一滴乃湯を求む。使中乃増て。一粒乃食あり。と魚猪天緒佛乃守護小依て。室小回を温ふる。香風吹き。脚身を温め。食を断む。と氣満く。餓小臨む。と一心不乱。行ひ。と。此は三十三天の中第六天小魔王在る。遙小下界を直下し。悉達太子乃雪山在る。昼夜を捨む。苦行し。其を忍ぶ。大い發た。彼斯の。信力堅固。た。正覺を得。然るに必だ法輪を傳。一切衆生を利益。佛法世小熾小行。我々春族彼ら為小困られ。遂小道壞乱せん。と。夏阿。樂ま。此は王小三人乃女有。

長女欲妃と。中女之悦彼と。中女之快觀と。三女又王乃夏愁乃色。其故を向魔王。其本末を説かせ。三女小曰。王夏愁乃更なれ。妾亦三人下界下り。色香欲。悉達を惑。淫欲を乞。其戒行を妨。王大喜悦。此義甚。急だ悉達を盡感せ。命む。三女領掌。王乃瑤珞を頂。天花を拂。五彩乃衣服を著飾り。妙香を芳せ。十二小粧。下界下り。夜中雪山乃北臺小入太子を礼拜。曰。天帝君が多年乃苦行を感。小上界の中。才智秀容。顔勝る者。太子乃新氷を扶。妾亦三人其擇小抽れ。茲小侍。媚を含情を作。其声頻伽鳥乃嘯。如。其顔芙蓉乃露を含。如。如何なる石心鉄腸乃者。香色乃為。小蕩さる。太子。心動。自若く。定心を煉。麻鬼女。猶も其行を妨。二個乃玉盃小菓を盛。太子小捧。曰。是。天帝脚園乃橋あり。一菓を食する者。百年乃齡を保ち。十菓を食する者。千歳乃壽を延。仙菓也。

君小猷りく延年不老たうらあ所なりと巧言小勸々れども。太子猶答ををりまを
 多年若行乃功位よとく六神通を得よと疾より太子乃行道を妨んと障碍する
 を知まひ如意を揚く。外面似善薩内心如夜叉と唱むを忽ち王乃苦も草葉と
 かり。盛る仙菓も衆乃毒虫と變じて。三女も花乃面負霜の如く消醜惡乃老
 波となりて面皺腰屈とくふと互小面を見合て大い小該れ本相小徳人とて
 まごも能れを周障狼狽虚空をきて逃回り又小得て其惑しを告魔王
 大い怒り其義なきを我雪山小至り集が行法を妨んと罵る小魔王小一男子有
 薩陀と号緒般乃神通を得り。依て又王小謂て曰悉達行力堅固なりとも。何
 程の更者有るん思男眷族を従く下畏下り。悉達が魂を拉ぐ。我心修行を
 止らせしるると乞王其約を吐かりとく是を許さふを薩陀悦び衆の六軍を
 招れ集り下畏降り雪山乃北臺を百重千重小圍と悉達早く王宮回り博論王
 乃位を踐よとく猶正覺を得んと欲せむ身を咬咀して殺せんといふ言多太子一
 動ふを徐小四面をんをん無數の六軍北臺乃四面小充滿を其輩頭牛の如く牙ハ
 利刀小修り身肥大なる者あり或一面三眼やて口口焰を吐者あり或頭三臂六有
 り每手弓箭刀鎗戈戟を把者あり或洞面眼やて口血盆乃如一身小生と毛ハ
 鐵針の如くなる者あり或丈高く腹大く鎌の如く爪を生ず者有他種々奇
 怪乃惡六收奉する小違あつて大焰を降し惡風を吹し霹靂天地小夷れ山河草
 木震動て世界も目前奈落へ没とると疑ふ怖る小んも跡たり然も太子
 公坐し御乃鹿群小居る如く唯是小兒乃戲ををて我刃刃か如く千軍倍
 怒激し近く責寄り太子を殺せんとも其時太子微妙乃声を發し緒惡莫作
 修善奉行と唱むを不測や六軍の刀鎗干戈鈎の如く曲りて用る事能くを前と放つ
 者ハ中途より飛回り却て六軍を射石を投擧んする者ハ敢て手放離れ火を
 降せむ五彩の花となり毒霧を降せむ香風と變り更小太子を害する更能くを
 薩陀案小相違し周障惑ひ眷族を牽り這々第六天へ逃回り悉達の行方當

動ふを徐小四面をんをん無數の六軍北臺乃四面小充滿を其輩頭牛の如く牙ハ
 利刀小修り身肥大なる者あり或一面三眼やて口口焰を吐者あり或頭三臂六有
 り每手弓箭刀鎗戈戟を把者あり或洞面眼やて口血盆乃如一身小生と毛ハ
 鐵針の如くなる者あり或丈高く腹大く鎌の如く爪を生ず者有他種々奇
 怪乃惡六收奉する小違あつて大焰を降し惡風を吹し霹靂天地小夷れ山河草
 木震動て世界も目前奈落へ没とると疑ふ怖る小んも跡たり然も太子
 公坐し御乃鹿群小居る如く唯是小兒乃戲ををて我刃刃か如く千軍倍
 怒激し近く責寄り太子を殺せんとも其時太子微妙乃声を發し緒惡莫作
 修善奉行と唱むを不測や六軍の刀鎗干戈鈎の如く曲りて用る事能くを前と放つ
 者ハ中途より飛回り却て六軍を射石を投擧んする者ハ敢て手放離れ火を
 降せむ五彩の花となり毒霧を降せむ香風と變り更小太子を害する更能くを
 薩陀案小相違し周障惑ひ眷族を牽り這々第六天へ逃回り悉達の行方當

辨之王大以殺之斯て八叶と此般八自身百千眷族を牽連く雪山降り
北臺小迫著く窺人多小太子石上端坐し身動も一むを王右手小鐵乃
大弓を握り。右手小鉾乃如丸箭五條を手按迅雷乃如丸惡声を發して曰你悉
達過去乃福力小依し適淨飯王乃子と生な何ぞ王位富貴を捨無益の魚為
道哉需此山中小餓死せんとも早悟く出家法を捨故卿へ還り轉輪王と
なり榮耀歡樂を極ち又母妻子成て安心せしよ猶迷をとり正覺を
得んをむ我此一箭小你が命を断せし你あまて梵天帝釈諸天神といも我が
弓箭を番を及く魂を消し肝を落して怖惑り豈況你小於老只速小去よと
罵りぬ太子眼を閉り足む其文三文余小て雲小跋扈し兩眼赫々しく日輪
乃なりび牛多如鼻尊なる山小似く耳根ま裂るる只血池とも縋る上下四
十根乃齒小劍を植りぐと疑れ鬚髮悉く鐵針小般より其後小百千の眷
族衆乃惡相説尽るる各眼を瞋し牙を咬ぶ善械を弄し隨り太子怡然

とて發れむと一度摩迦薩如意を以て虚空を摩むを梵天帝釈四天王より護
法善神諸天將天龍八部小至るる一瞬乃向小來降し箭前を放ち喊を發し軍小
向小て王大の狼狽身を翻りて逃回れ衆乃眷族中途を失く八方散乱し
茲小於太子如意を收め以て天部諸將を天上へ昇む以て是等是等始て王
百般千般小方便を之太子乃道心を妨む計も太子乃石心動さる更須彌山の如
く信力堅固小て雪山小修行し更六年小をたむ

悉達太子得蜀偈正覺成道

太子雪山小若行り更六年乃星霜を徑るる。いま爵陀羅十師耶小見
むがれを如何も相見し正覺成道乃真義を究んと心中願む例乃如三臺
を廻り法性乃峯小到所小遙乃溪底小虚空小音く大音あり緒行無常是
生滅法と唱り太子更く大悦は是正く無為成道乃要文より是是唱者
凡人を察する小爵陀羅仙なる争う拜錫せざるを雪を踏氷を今

く深溪乃底へ尋下りよふ唯見其丈二丈許なる悪鬼八面九足あつて眼中火の如く只紅蓮の池乃如くなるが岩頭小腰あけ吐息焰の如し太子此等恐怖を惡鬼不對曰即今乃二句の偈を唱へ你なる悪鬼答て曰然り太子曰猶あまりの偈有や否や悪鬼曰猶二句乃偈あり太子曰然らば我小唱へせよ悪鬼曰往昔閻浮提小大國乃王あり名を脩樓婆と号く富天下成保ち財宝を散く億兆乃民を撫育と然るも只是二世の仁恵あり久遠乃思ふあらざる我歎死正覺乃法を説く死道師を求む毘沙門天王其心を察し化し夜刃となり緒乃悪相を現し彼王宮の門小到り王の為小正覺乃法を説くと呼る大王歡喜殿上小結し法を安んじ望まらば夜又曰我今甚く餓なり王乃寵愛乃后妃を以皇子我小予く食しめむ能王の為小妙法を説く人王是を許諾し即ち最愛乃夫人を以小皇子を召出さく後又小予後及即時小予乃妻子を裂喰ひ而後正覺乃法を説くすと安其如我小腹中餓なり你我小食を与む残りの二句を唱へ安んじ太子曰你今如何なる食を

欲せしや悪鬼曰我唯人の肉を欲すと你残る二句の文を安んじ欲せむ我が口中小入る食しめむ我你が魂魄小唱へせむ太子欣然として曰く他の命を借る自乃命は嗣更あり他は自乃命を貸し他の命を嗣とあり自以て他なり自他一如と悟る何ぞ命を惜むをたて身躍して惡鬼乃吊し飛入る心不思儀や悪鬼が口裡の利齒忽ち八葉の蓮花と化し安坐せしなり生滅々已寂滅為樂と唱へ今また惡鬼と又作るも忽ち云々小算る毘盧遮耶佛と現下太子を掌中居く法性室其室小秘しなり穢々我ハ惡鬼小あらざり爵陀羅師耶と本來ハ毘盧舍那佛なり御身前後十二年乃戒行急りむら小依り今己小正覺成就せり早く世に出る天人俱不利益しむる合掌礼拜し倉卒小虚空小音樂吹え五彩乃花降る十方三世の緒佛三身五智七佛其他五十二菩薩緒天善神梵天帝釈四天王天龍八部小至るも空中小遍滿し合掌怡悦しは異口同音小三界六道乃教主十

八面九足の靈龜

悉達太子之詩と句の偶を授る圖



方最勝光明無量三学無碍億々衆生平等引道乃能化南無釈迦牟尼
 如来本師本佛と唱へん是より悉達太子を世尊釋迦牟尼如来と八十
 たり。然るも多年脚望乃如。正覚成道一む三十二相八十種好の脚姿金光を放
 ち十方世界を照しむ。十方世界より光明照さるる十神力を現し衆生引導
 直指成佛道の本願を充たせしむ。難有た斯く釋尊ハ真如法性妙覚臺
 乃上より三明六通を具足し三千世界過去未来現世の三世を見徹し小是
 より彼小生ト彼より是小生ト善悪乃應報不隨ハ人間天上地獄修羅餓鬼畜
 生乃六道不流轉し。死生乃苦海不沈淪し十二因縁の受。触。六入。各色。織行。无明。
 以上上土。夢永く覚む我と緒の苦悩を受る吏を隣とむ。我神力方便を以て廣
 因縁去。夢永く覚む我と緒の苦悩を受る吏を隣とむ。我神力方便を以て廣
 く一切衆生乃此煩惱を救えん。三畏衆生ハ皆我が子なり。衆生入地獄我入地獄
 衆生出地獄我出地獄衆生苦悩我苦悩衆生安樂我安樂ト大慈愍心を盡
 しむ。十二年の星霜を往く。頃十二月八日。曉の明星を戴た初て雪山を立去り

世小出山乃釈迦と唱く写しむ。此時乃脚姿なり

三迦葉師釋尊

斯く釈尊ハ雪山を出出ひて波羅那國不到り。小女ハ賊小臨む。天の淨居佛
 是を察し化して道士となり。跋利村とて里小到り土人小謂く曰。迦陀國淨飯王
 の太子悉達。幾心修行の爲小身命を抛し十二年。今已正覚成就し一切衆生
 を濟度せん。頓く這里を還り小供養し。無量の幸福を得よ。土人見
 らん。土人悦び密教を綱く待居り。程なく世尊きこせ。土人見
 たり。小光明輝た威相在嚴。世小類をなれ。歡喜踊躍し佛足を礼拜し。敬密
 麩を献る。世尊怡悦し。小ひかり受。小意を心中小念じ。過去の緒佛皆
 鐵鉢を以て食を受。予ハ鐵鉢を以て是を受んと如意を以て虚空を擊む。天
 上より四天王各二鉢を捧ぐ。佛前小降り来る。世尊亦念む。予一王乃鉢を受。予
 残る三王本意を失。不如四鉢も亦受人小。茲於天王乃鉢を悉く受。四の鉢

を掌乃上置祈念一む忽然とて合して鉢となり四乃重圓の残る者土人の
密教を受む以呪願して曰く三寶供養の施主當来あく安樂无病多福長壽
来世あく八天小生下緒乃快樂を受んと唱密教を喫一む以而して鉢を洗ひ嗽て土
人小三飯を授ふ二曰飯依佛三曰飯依法三曰飯依僧と土人亦隨喜の涙を流し恭敬
礼拜して去り斯く世尊ハ波羅那國鹿野苑於て四天王乃為小四締乃法を説
法輪を轉じむひれより鹿野苑を去り摩竭國を過りむふ日將小暮んをこれ小
依く優樓頻螺の許へ立倚く宿を乞ふ此優樓頻螺といふ名を加葉といひて兄
弟三人あり俱小仙道を學び火事へ神通廣大なれ國王も萬民も宗敬する
師又乃如然を如葉心中天が下小我小勝る者あつと自負する小一十年若た汝
孫門小傳立宿を乞加葉緒て是を迎へ入對面する小三十二相具足せ好相なれむ
是凡人なりと思ひ問曰你ハ何國より何里へ通る者なるや世尊答て曰我ハ伽陀國
乃主淨飯王乃子悉達なり曾く發心菩提の道を求め檀特雪山二山小難行する

十二年無上真正の道を得り依く普く四天下廻りて一切衆生を化度せんと
欲き然ふ今日這里より日暮尊者の大名を告一宿を需ひたり加葉おれり
諸小言小はえ一淨飯王乃子降誕の瑞應現し學ぶに緒般の技小通達
せ悉達なるやそれ源世榮を捨り菩提を學其道迂遠し我道乃真
なる小不如く渠が行力を試んて世尊小謂て曰諸小名小高た悉達太子や
我脚身の雷名を告更久天縁熟し相見ると何の幸う是小過人なりあ
我緒房悉く弟子住り宿進ま小席なり唯後園一字の石室あり最廣く清
淨なるも一難あり其故裡小毒龍栖り稍もとれ人を害と我是を奈何とも志じ
世尊曰毒龍在りも若く其石室を一夜予小借む加葉曰厭むと心を隨小
宿しむと緒小世尊飲然とて童子乃引路小從ひ彼石室小到り結跏趺坐し三
世親御坐する果て毒龍世尊を害せん身を搏り猛火を發し火焰を吐く
石室を燒其火乃光天を衝り熾然とれ加葉の弟子亦遙み其火光を乞く大い小

三迦葉 不 飯 順 圖



三迦葉 釋尊と 石室小宿と

跋耆師斯と告ぐれど加葉室を出火光を奪人手を拍て笑て曰隣を汝誦毒龍乃為
不害せしむと急小弟子指揮石室の辺り水洗た火を消しむるも敢
く消され其傍捨置り回り々々世尊八猛火乃殺り来るも動むを端然と安坐し
むひ毒龍對一喝むむ毒龍忽ち僅の小蛇となり働く更能く世尊是をうて鉄
鉢の裡に置三飯依を授ふ斯く天明及んが加葉諸弟子を後へ石室不到りふ
石室已不灰燼とれも世尊自若くく在ふに加葉孩た御身夜來毒龍の火を發
茂んすと問世尊微笑しむ毒龍火を發し石室を焼くも焉ぞ予ら真正乃
金剛鉢を燒更を得人予毒龍を降伏し已不茲有と鉄鉢の裡を指しむむ加
葉大い孩た此汝汝を神通侮かす然も我が道の真なる火不如くを告ぐ本所
下坐し終日座禪工夫し夜不至も四天王來降して世尊乃說法を聽受ある各王
光明を放ち日月乃光よりも猶明なれど加葉が弟子亦遙く是を人相習く曰什麼

毒龍八汝誦已降伏す今宵亦火光ある何等の光なるんや師乃許不往斯と
告ぐれど加葉も縛り弟子と俱に潛小窺ふ四天王來降して說法を聽居む但し
弟子們の光明のより其尊容をみる更能くも加葉の親く見んと歎息しあが猶
及伏乃心かく本所小回ぬ世尊八彼が發起とて日我待せしと傳りふと都く七日小
至りぬ其夜く小梵天帝釈緒天緒菩薩天龍八部く來降して說法を聽ふ
小ど母夜世尊の御坐の四面光明赫々たり加葉八母夜此奇持を見安し七日小至
く初々慚愧後悔。悉達く神通廣大なること我ら及ざる更遠しと慢心を退け二
百五十人の弟子と俱に世尊の前小到り恭敬禮拜して白願く大知識我が輩を教導
むと願を世尊善哉比丘と賞しむひ髮を剃せ袈裟を著せ此們が為不歸法
論を傳しむ是も依加葉法眼淨を得阿羅漢果を得り此義を更傳て加葉
二人乃弟耶提加葉伽閣加葉の二百五十人はこの弟子を牽く曰く佛弟とあり各
法眼淨を得阿羅漢果を得り

